

栃木県那須郡那須町湯本上ノ山鎮座

那須余一祈願社

延喜式
内喜温泉神社略記

主なる宝物

卍大鹿角一 温泉発見の折捕獲せるもの 社紋はこれにちなむ。

符ノ三郎行広公奉納

九岐大鹿角一 建久四年四月右大將源頼朝奉納（那須野原卷符の時小山朝政の射止めたもの）

鎬 矢（一）

臺 目 矢一 那須余一宗隆公奉納

征 矢一

桧 扇一 屋島の戦に平家の女官玉虫の前より余一に贈られしもの。

古 面二 那須氏の本殿建立時鬼瓦としてつけたもの

三十六歌仙（三十六面）

慶長十五年那須資晴公奉納

那須温泉一 明国の心越禪師物並書

八 景 詩 元禄六年三戸光圀公奉納

金 幣一銘 奉寄附幣帛大関信濃守従五位下円治比氏増栄

貞享四丁卯天九月吉祥日

戎 衣一 藩籍奉還の時、神恩を謝して、大関信濃守奉納

温泉神社と那須余一の関係

那須余一宗隆は、那須地方の豪族である那須太郎資隆の十一男として生れ育った。

源義経の東国参陣の時これに従い、以後義経の騎下となつて源平戦を戦つたのである。

史上有名な屋島の戦で扇の的を射て名声を上げ二十万石を頼朝公から賜つた。

温泉神社と余一との深いつながりを表すものとして「平家物語」にこう記載されている。

余一屋島で祈ることば

「南無八幡大菩薩、別しては吾が国の神明、日光権現宇都宮、那須温泉大明神、願わくはあの扇の真中射させてたばせ給え……」と、凱旋の後その神恩の深いことを謝して、大社殿を寄進してその誠を表した。

余一は不幸にして二十四才の短命で世を去つたが那須氏は代々厚く温泉神社を崇敬して慶長年間に至つた。後那須地方は黒羽藩大関氏の有となつたが、大関氏は那須七騎の勇将であつた関係上藩主の信仰富に厚く、二十石を賜つて明治に至つたのである。

一、祭神

相殿

大己貴命（おこなむちのみこと）
彦名命（すくなひこなのみこと）
普田別命（ほんだわけのみこと）

一、創立

第三十四代舒明天皇の御代（奈良朝）、湯本より南方約八キロメートルの茗荷沢村の住人、狩ノ三郎行広は、小牛ほどの白鹿を追ひ求め矢傷を負わせてなおも追ひ続けて雪不尽山（那須岳）の麓、霧生谷（元湯附近）に至った。濃霧に包まれ白鹿を見失ひ茫然として佇んでいる時、岩上に白髪のお翁表われ、「吾は温泉の神なり汝の求める鹿はかの谷間の温泉に浴しておれり、その温泉は万病をなおして甚だ効あり。鹿の浴するも手負いを癒さんがためなり、汝よろしく之を聞きて万民の病苦を救うべし」と言い終りて消え去る。三郎白鹿を射止め、温泉を発見して神社を建立し歳時の祭礼怠りなく崇敬の誠をつくしたと言う。これが本神社の創建である。

一、由緒

上代より温泉名を冠せし神社は、延喜式神名帳（西暦九百年代）に十社を数え、当温泉神社の靈驗は国内に名高く、奈良朝時代の貴族の温泉浴のことは正倉院文書によりても明らかである。従つて神位次第に高まり、貞観十一年（八六九）に従四位上を授けられた。後世那須余一宗隆西海に扇の的を射るに当り、当温泉神社を祈願し名声を轟かして那須郡の総領となるや領民こそつて温泉神社を勧請し奉り、貞享三年（一六八六）六月十九日正一位に叙せられた。

現在那須郡内に約八十社の温泉神社を数うるのをみればいかにこの地方の信仰を集めていたかが推察される。

(イ) 延喜式神名帳記載 下野国那須郡三位並小温泉神社

(ロ) 三代実録記載 貞観五年十月七日丙寅授下野国従五位上勲五等温泉神従四位下。

同十一年二月十八日丙辰授従四位下勲五等温泉神従四位上

(ハ) 正倉院文書駿河国正税帳記載 依病下。下野国那須湯従四位下小野朝臣 上一口
六郡別一日食為单漆拾捌日 従七十二口

(ニ) 文治元年那須余一宗隆、源義経の平氏追討の軍に従ひ、屋島の海上に扇の的を射る時、冥目して故郷の那須温泉神社に祈る。名声を誉げて後、神恩を謝して本殿、

拝殿、神楽殿、神供所、玉垣、廻廊、鳥居に至るまで新たに建立して、一門をあげて厚く崇敬した。代を経て那須氏の麾下大関氏に領有されたが引き続き崇敬され社領二十石を奉献されて藩主自らの祭礼参拝が度々重ねられ明治にまで至った。皇族の宮殿下のご参拝は、大正三年六月梨本宮殿下を始めとし、大正十一年久邇宮良子女王殿下、久邇宮殿下、同妃殿下、同信子女王殿下、続いて大正十二年八月摂政宮殿下（昭和天皇）の行啓を仰ぎ、境内に五葉松のお手植をいただき昭和九年九月李王根殿下、同妃殿下ご参拝（お手植え五葉松）その他の諸皇族宮殿下

(ホ) のご参拝も数十余度におよび尊崇の域に浅からぬものがある。

一、幣殿、拝殿

昭和六十年十月竣工

一、社務所

平成二年十月竣工

一、祭典(大祭)

祈年祭 二月十七日

例祭 十月八日・九日

(イ) 献湯祭(八日夜) 湯元鹿の湯を始め各温泉の源泉を奉つて感謝を捧げる祭。

(ロ) 献幣祭(九日昼) 藩主大関氏よりの奉幣の古式にならない神社本庁からの奉幣を行う祭。

(ハ) 神幸祭(九日昼) 宮司を始め祭礼関係者および獅子舞(町の文化財指定) その他約百名が神輿に供奉して各町内を神幸する祭。

(ニ) 新嘗祭 十一月二十三日(勤労感謝の日)

一、境内社

見立神社(祭礼日、五月二十七日) 温泉発見者、狩野三郎行広(人見氏始祖)の創建、天児屋根命を祀る。後温泉発見の功により狩野三郎行広合祀される。慶応元年六月正一位を授けられ更に昭和二十九年温泉神社と合併、境内社となる。

・祖霊社(祭礼日春秋彼岸並びに八月十五日) 日清・日露の戦争より太平洋戦争に至る氏子の戦没者と地元的神葬祭家の祖先を祀る。

・愛宕社・稚祇神社・山神社

・疱瘡神社・琴平神社・神明宮

・稲荷神社・天満宮

一、境外社

・那須嶽神社(開山祭五月八日 閉山祭十一月八日) 温泉神社の奥宮、那須嶽の頂上に鎮座大己貴命、少彦名命を祀る。境内約八十坪(二六四m)。嵐除、農業神として崇敬され、奥羽、関東地方よりの登拝者をみる。

一、境内地

総坪数約一万二千坪(四万m)でナラ、カエデ、ツツジなどの自然林の中に在り、盛夏にも涼風が絶えない。

社殿より北約三百メートルの所に史蹟殺生石を望む。芭蕉が来拝したる折の句碑が自然石に刻されてある。「湯むすぶ誓も同じ石清水」

なお広前庭には摂政宮殿下(昭和天皇)、良子女王殿下(皇太后宮)お手植五葉松あり。